

# 太 棹



第九拾五號

如菱虎之助  
しげき画

東京 太 棹 社 發 行

# 胃腸にミカラチ

東京市日本橋區通二ノ五  
新潮製藥株式會社  
電話日本橋三八一二番  
銀座東京七〇一〇八番

## 關西料理

すつぽん焼なら江戸前蒲焼なら  
御宴會は大勉強すべて安値に

# 円六

九段 下組 橋

電話九段四〇〇六番

女中は皆藝人揃ひ・太棹の彈き手も揃  
へて皆様をお待ち致して居ります。

— 円六獨特のサービス —

風流・金ぷら・茶漬

【美地句】

# 去月屋

新橋二ノ八  
電銀二〇八

# 御 挨拶

南風彌温の候目下我

皇國振古未曾有の事變下に在りて各位愈御健祥天分の御奉職に御盡瘁の條爲邦家慶賀  
此事に候

却說不肖今回玄素双乍の御推舉を蒙り故鶴澤觀西翁を襲名いたし來る五月二十三日  
其披露會を仁壽講堂に於て開催の事に相成申候不肖七十五歳の類齡を以て然も未熟  
の技を上演の事は内心不安に不堪候得共爰一生一代晴れの舞臺なれば藝術報國の念  
に燃へ戰場に臨む決心にて出演仕候果して御期待に副ふや否やは一に係りて諸彦の  
御聲援に依るものなれば不肖の微衷御憐察當日は御家族様方は申に不及御近隣御知  
已様御誘引賑々敷御來援の程切に御願申上候先は御挨拶迄

草々頓首

昭和戊寅五月吉祥日

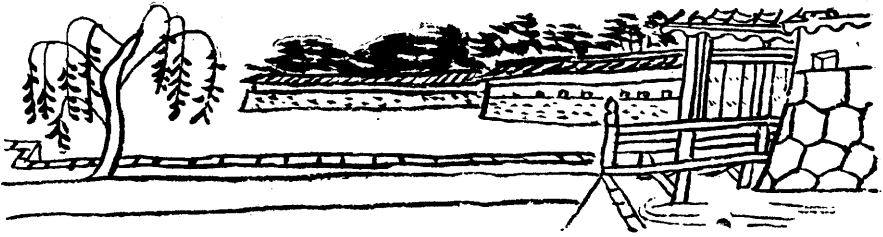
香伯改め

二世 鶴澤觀西翁

會 夫 太 義 善 追 氏 つ も た 内 竹



氏 雄 保 息 令 に 並 氏 子 久 喜 人 亡 未 が 央 中 列 前



太 棹 第九拾五號目次

少し調べなさい	十時一平	(二)
浄曲漫評	金丸	(六)
義太夫作がらの事	翼々居士	(九)
戯曲の類似	橘光風	(一〇)
素義風流線	芳河士	(一三)
音曲昔噺素養	鐵老生	(一四)
義太夫界起源いろく		(一五)
太棹社彙報		(一六)
會報	森三好	(二三)
當座帳		(二六)
編輯後記	芳河士記	(二六)
表紙・カット	宮尾しげを	

# 少し調べなさい

— 太 棹 時 評 —

十 時 一 平

一體に義太夫界の人位ものを讀むといふ事の嫌ひな人種も  
少なからう。

勝手な時には、やれ古今の名文であるとか、實にいゝ事が  
書いてある等と、一人で悦に入つてゐる辭に、その辭自分の  
語る物位しか知らず、あとはてんで聞かうとさへしない連中  
が多い。

いやそれどころか、自分の語物だつて、語る時位で、あと  
の場合にその文章の眞の意味を味つたりしてゐる人は、失禮  
乍ら先づ少なからうと思ふ。

だから、その證據には極く安易な文字の解釋さへ知らない  
で、我無者雜に語つてゐる者が多いのだから、全く驚くの他  
はない。

これは有名な話だから、東京ではだいたい知られてゐるらし  
いが、例の竹澤龍造の身振芝居で、「攝州合邦辻」の玉手御前  
が「蘆の浦浦」といふ件で、突然玉手なる者が立身でひよ  
と左の足の裏を見、又ひよいと右の足の裏を見るといふ科を

したのを發見した事がある。

これは振付の龍造が「足の裏裏」といふ意味にとつて、女  
優共にさう教へたのだらうと思はれる。

まことに以て珍玉手中の珍玉で、流石の三河屋荒次郎も、  
冥途で「俺より凄えのがゐやアがる」とあきれてゐる事だら  
うが、まア／＼龍造程度の身振芝居なら笑ひ草にして過せも  
しようが、文樂座の文五郎ともあらう人形遣ひが「俊寛」の  
千鳥で「蘆かき分け」といふやつを、「足掻き分け」と思つて  
奇妙珍無類の動きをしたんだから、これは笑つてはゐられな  
くなる。

尤もこれは一寸問題になつたにはなつたが内部の問題にな  
つたわけで、外部即ち見物業は矢張り文五郎を褒めてゐたと  
いふお有難い事があつたのだが、老生が何故こんな事を今更  
いひ出したかといふと、つまりは義太夫を語る者、人形を遣  
ふ者、つまり素人、玄人を通じて餘りものを知らな過ぎる事  
を悲しむのである。

さう申すとさも老生がお高くとまつてゐるやうにも思はれやうが、しかし乍らこれでも人に理合ひの一つも説かうとしてゐるに就ては少しはものも読み、人にも訊ねてゐるからこそこんな事もいへるわけだ。

四月の歌舞伎座で「妹背山婦女庭訓」の山の段が出たが、例の通り團菊祭なので、鎌倉くんだりに住んでゐる老生の處迄切符がやつてきた。

そこで三人連れで見物に出かけたわけだが、連れの一人は名前は申さぬが老生の義太夫の師匠である。

ところがいろいろ話してゐるうちに、この段の登場人物、久我之助の事をクガノスケと發音してゐる事を發見した。

そこで老生は、

「師匠、あれはクガノスケであらう」

といふと、非常に驚いたらしく、

「どうしてとせう？」

と訊ねるので、どうしてといふ事もないが、昔の本ならたいていクガノスケと振り假名がしてあるし、又老生がさう信ずるわけは、山城に久我（クガ）といふ處のある事も申し添えたのである。

一體この山の段なるものは、随分人名が難解とみえて、定高と書いてサダカである。これを定賀、定嘉などと書く小芝居もあるがこれは勿論定高。

それから大判事の事の字を大判司と書くのもちよいとあ

るが間違ひである。

そのうち最も間違はれ易い久我之助を、師匠が間違へてゐる事はまことに残念であつた。

老生の申したい事は實にこゝである。

師匠といふものは、別に學者ではないのだから、師匠相傳で間違ひを少しも不思議に思はない。

これがまことに困つたものだと思ふのである、

つまり少しも自分自身の持つてゐる藝、自分自身のいつてゐる事に對して、少しの反省もない。何等の疑問も起こさない。

これが義太夫道今日の衰微を來した原因である。

反省のないところ、疑問を持たぬところに進歩はないのである。

ほんの一例が以上のやうに、商賣人達の情けない現れの一つである。

尤も古鞆太夫のやうに、研究してゐる商賣人もゐるにはゐるが、商賣でやつてゐたらその道を研究しないといふものが先づ他の社會にある事であらうか。

さういふ商賣人が、今日他人様の藝には悪口をいつて、自分の藝は凄いいものだといふおどかし中を利かしてゐるのだから、全く以て恐ろしいといはざるを得ぬ。

東京のおえらい商賣人だが、これがまた酷い唯我獨尊で他所へ行つてゐる旦那衆に、へい何々ならいゝのを私は知つて

ゐますから是非教へませうだの、へい先達中あなたに教へようと思つて大阪へ行つて、これ／＼のものを調べて参りましたからどうぞお稽古なさい。

等といふ體のよい押し賣りが、今時東京の眞中にあるのだから、これも亦驚きである。

一寸調べに出掛けた位で、立派なものゝ出来る位なら、なにも大様や大隅が血の出る思ひはしなかつた筈である。

さうかと思ふと、近頃義太夫の批評を書く人間で、可成り大馬鹿を曝して得意になつてゐる人間があるやうである。

なんでも理學博士だとかいふ噂を聞いてゐるが、しきりにタレ義太の批評を書いてゐる先生が（尤もあれは批評ではない、どうして／＼義太夫の批評位至難なものはないので、現に一流の劇評家でも文樂がくると、酷く影の薄くなる連中が多いのでも知れやう『玉三』の白書院をシラではないかとかなんとかみつともない事を書いて、一寸問題になつたらしいが、老生は實際あれをみてひそかに顔の赤らむを覺えたのである。

理學博士とかなんとかいはれてゐる者が、少く共義太夫の藝の事ではなく、文字の讀み方について、藝人からびたりと返答されてしかも誰だかが間に入つて、これ亦ものゝ見事に軍配を藝人の方に擧げられてしまつたなどといふものは、普通人ならば先づみつともなくて恥かしくてたまらない筈であるが、老生のいひたい事は、つまり批評家と自ら許して、先

生などと女義連にいはれてゐる人間の無智についてである。

商賣人がさう、批評家といはれてゐる人間がさう、（尤もお世辭ぢやないが「太棹」にはそんな批評家は一人もゐない。第一みんな「太棹」の寄稿家連は調べてゐるらしいところがちやんと見えてゐる、いや、お世辭ではない）全くお情けなしい事といふ他はない。

どうか研究して貰ひたい。

研究して解らない事をお互ひに質問し合ひ、そして個人の問題でなく、その成果を廣く義太夫界の爲に進歩發展の實としたいではないか。

藝自慢のこゝをかういふからいけない、だの、あそこをあの事いつて等といふ連中は、どんな時にも五人や十人はゐるものだが、あそこをあゝいふ氣持ちで語つてゐるのは變だ、とか、あそこは考へ違へをして語つてゐる等といふ事をいふのはまことに少ない。

いや寧ろ殆ど無いといつていゝかも知れない。

最近止むを得ない事情があつて女義を二度ばかり聽いて考へた事だが、結局義太夫といふものゝ出来不出来を論ずるのは、如何にその太夫なり三味線なりが、その語物に就いて考へてゐるか「安達」を聽いたのだが、その祭文がまるで踊りを踊つてゐる始末、それはとりも直さず袖袂の心になつてゐず、安達の三段目の心を知らないといふ結論が下されるわけで、そんな太夫に正しい義太夫の語れやうはないのだ。



それから矢張り東京の一流の某女義の「新口村」を一寸聽いて驚いたのは、孫右衛門が當然愁ひでいゝところを、笑ひ顔して嬉しさうにいつてゐた例が、一寸した時間のうちに列舉し得ぬ位澤山あり、つくづくあきれ果てゝしまつた。

義太夫や謡曲は、心を表現する至難の藝である。どうかもう少し考へて語つて欲しい。

同時にもう少し考へて批評して欲しい。

無智文盲、無反省は決して自慢にはならない。

一字一句を大切に語るのが、義太夫の面白味であり、鐵則でもあるが、それには少しは調べた上での中身がない事にはほんたうの心は語れるものではない。

批評家先生も、一寸辭書を引けばすぐ解るやうな下らぬ事をいつて人騒がせはしない事ぢや。

それから無責任な感想は述べぬものぢや。

津賀太夫の引退の歌舞伎の愚評を、例の理學博士とか々都新聞に投書したのを見たが、「河庄」の事を確か大變當日でのよきものといふ風になつておいて、別のものにそのおなじ「河庄」は食事へ出掛けて聞かなかつたと書いてあるさうだ。一つ愚評を二つのものに迄投書するといふ男も一寸お有難らしいが、以上のやうな無責任な愚評は氣をつけなくてはけなない。

商賈人も素人も、評者ももう少し眞面目に義太夫の事を考へてみては如何か。

津賀の引退の事を書いたから一寸これも觸れておくが、あの口上の二列目と三列目の男と女とが尻をつゝいたりして、舞臺で巫山戯てゐたのを誰か注意したものがあるか。言語道斷の話で、生れてはじめて本行で木挽町の舞臺を踏んだのだから、嬉しまぎれに少し氣も上つたのかしらんが、老生はその人物をだいたい知つてゐるが、かういふ不良共こそ斯道から引退さすべきで、誰かがえらさうに口上をいひたい爲に、たいして引退したくもない人間を引退させて、その癖その口上が、口上にも演説にもなつてをらんといふ醜態をさらすなどより、さういふ不量見な奴らこそ充分責むるべきであると思ふ。

素義の思ひ上つた連中に就ては又いふべき折もあらう。反省せんければいかん！ 義太夫界よ。

## つゝじと新緑

箱根強羅温泉

茶代  
廢止

觀光旅館

電話宮ノ下 長一六〇番  
三一六〇番

ラチオ 淨曲漫評 金五丸

大阪女義 〔三月二十一日〕

唄とツレ弾

堀川の鳥邊山  
酒屋の妹香川  
野崎のオクリ

竹本 雛昇  
絃 豊澤 小住  
琴 豊澤 團秀

彼岸のお中日、春季皇靈祭當日の晝間演藝である。アレヤコレヤとBK苦心の義大夫の一ト趣向。時間全部で二十分、先づ最初が「女肌には……」と堀川の鳥邊山である。選ばれた語り手イヤ唄ひ手とあつて、聲量の特に豊かな、又た美しいといふ極め付。さすがに結構ではあつたが、婆の詞や、最後の「お鶴は立つて……」のあたり、時代物になつてしまつたのは遺憾であつた。絃の小住さんは定評あるもの、鮮やかな事である。直ぐに

酒屋の奥の、書置のくんだり「聴いてゐるさの……」と、これも上等。イヤミや當て込みの無い……團司より此の方が……といふ好評である。琴の團秀ともよく合つておもしろかつた。最後の野崎で、小住さん、チョとツボを外した處などあつたけれど、賑やかな事で、一般に大受けであつた。

文樂中堅 〔三月二十三日〕

箱根靈驗覺仇討 〔錢別の段〕

竹本 文字太夫  
絃 豊澤 廣助

初花、勝五郎が、諸國を遍歴する中に旅費を費ひ果し、その上に覺といふ業病に罹つて難澁、非人の群に入つてゐるを奥州白石の里正徳右衛門といふ老人が、不惑に思つて、錢別を與へて發たせると

新義座連 〔四月四日〕

烏帽子折奉源氏 〔伏見の里の段〕

竹本 南部太夫  
絃 野澤 勝平

いふ筋で、例の、此の戯曲の大詰、箱根の瀧の段の前段である。近頃、時にBKでは、相當の太夫をして、この種、所謂端場物を放送させて呉れるのは、我等デッの歓迎する所で、東京に、此の錢別の段を語る素義の方のあつたのを知つてゐるが、とにかく珍しいものである。文字太夫氏は、早くから、大物語りになると、目されてゐる人であり、絃の廣助君と共に、文樂でも今少し用ゐられて好い人であらうが、どうやら下積みに扱はれてゐるのは遺憾である。當夜も總て結構な出來で、一般受けはともかくも、義大夫を投げて語らぬ好い處のある人で我等特にその將來を期待する。

この語り物、萃源氏は、彼等が先頃大阪で公演、好評を博したもので、東京では、梅本香伯老今の觀西翁が、最近、絃を猿藏氏に、語りを、湊大夫、浪花大夫、朝見大夫等に移し、翁自から主役宗清を語り、更らに、近江清華氏に教へ、今では素義としては清華唯だ一人、これを知つてゐるといふ珍らしいもので、上方では十餘年前、加藤享博士が語つた事があるといふ。南部大夫の、常盤御前や、三人の子役は、その本役である上に、宗清の「笑ひ」なども大元氣で、さすがに、近時、腹が出来たと喜ばしい聴物であつた。段切りの「急げや急げ山鳥の、尾のしだり尾の長居は恐れ、お暇と夕げの鳥が啼くあづま路指して飛ぶ鳥の、飛ぶが如くに下りける、心はさすが大鵬の千里一翔源氏の運、開くる末こそ……」など、三味線の手と共に面白いことであつた。

大阪女義

〔四月十六日〕

壇浦兜軍記

阿古屋琴實の段

(カケ合) 阿古屋 竹 本 雛 駒

重 忠 竹 本 綾 助  
 岩 永 竹 本 綱 龍  
 榛 澤 竹 本 雛 昇  
 絃 豊 澤 小 住  
 同 豊 澤 東 重  
 胡弓、琴 豊 澤 團 秀

東京女義

〔四月十九日〕

蝶花形名歌鳥臺

小坂部館の段

絃 竹 本 越 駒  
 鶴 澤 三 生

大阪の女子因會の大會が、北陽演舞場で催はされた、その中の、阿古屋の琴實を、八時四十分から五十分だけ、中繼で放送されたのであつた。三曲が主とあれば、小住さんの絃を聴く爲めと申しても可い。されば、小住さんの絃は、世既に定評あり、先づく〜と判らぬながら謹聴致したる次第なるが、三曲と銘打つて、アノ鼓弓は如何にしても、ヒド過ぎた。それで、長々と鶴の巢籠りは、第一、絃と律の合はない點に於て、タテの小住にも一部の責任はないだらうか。琴の方は先づ、アノ程度のものであらうとおもふ。

蝶八は近頃冴え返つて、女義の人々によつて、時折聴かれるやうになつたもの越駒君は、アノ體格なり、小坂部兵部はさすがにシツカリしてゐる。諺ひは無論大素人だが、後の物語り、さうだ、この物語りは、少し手負ひの老人としてはシツカリ仕過ぎてゐたかも知れぬ。二人の姉妹、二人の孫たち、いづれ劣らぬ出来先づ女義としては、總體に好い點を入れて可い。絃の三生さん、先代三生のやかましい、本格的の仕込みを受けた人かどうかは知らぬが、これも相當の點を入れて可いとおもつた。

大阪素義

〔四月廿四日〕

義太夫三題

一、双蝶々曲輪日記 橋本の段

語りの方に至つて、重忠に品位微塵もなく、此の曲の重忠としては、初手から落構だつたのは皮肉である。

山田 義鳥  
絃 豊澤 小住

第五回コンクール入選者三人のトツプを承はつた義鳥さん、若いに似合はぬシツカリとした語り口、殊に、演し物も凝つた割に、要領を得たヌキ工合、二十分に、此の淨るりのキキドコロを悉く聴かせて、シカモ津太夫振りの襷昇甚兵衛など巧いもの、榮三の舞臺を思ひ出させたのは、お手柄であつた。

二、繪本太功記 〓 尼ヶ崎の段 〓  
下 瀬 千 里

絃 竹 本 雛 昇

十次郎の出陣から、操のかゞみまで、お時間一ぱいに、御自身は立派に溜飲を下げられたらしいが、さて、前の若手の橋本に比して、如何にも素義らしい語り口は致し方ない義でござつた。ドコといつて悪い所もないが、屈かぬ處の多い高座であつた。

三、菅原傳授手習鑑 〓 寺子屋の段 〓  
武 居 信 濃

絃 野 澤 稻 丸

信濃さんといへば、報知新聞の東西競演でも、感服させられた大家である。』かゝる處へ春藤支番』から『襷』までを相當に張り切つて語られたのだが、どうも前に聴いた陣屋ほど頂だけなかつた。呼

### 福岡貢の觸書

左に掲ぐるは、油屋十人切で知られた福岡貢(孫福齋の事)の事實を確かむるに足るべき觸書で、寛政八年は今から百四十五年程前にて、月仙は伊勢山田寂照寺の住職であります。

一 札

宇治浦田町  
孫福九太夫悴  
孫 福 齋

右之者昨四日夜古市町油屋清左衛門宅に於て清左衛門母親並に茶汲女及二殺害一その外の者へも手疵爲し負逃去候趣き相聞候年齡廿四五歳に相見へ惣髮に

出しの子供を、二人だけにして、アトを食べたのは、時間の都合とおもふが、結果は立派に二三十分餘つたやうで、ヌイタゞけ損をした譯、とはいへ、東京にはザラには無い語り手だとは申し上げられる。

て色白く柔和に相見へ候右の者見當候はゞ早速捕押へ早々可ニ申出ニ萬一隠し置後日に相顯るゝに於てはかくまい候ものは勿論其所役人共迄嚴敷咎申付候間町在裏家迄無ニ油斷ニ穿鑿可ニ致候

五月五日

右御觸書の趣き承知仕候拙寺々内に右躰の者曾て隠し置不申候若し隠し置候て後日相知れ申候はゞ拙僧可爲ニ越度候仍而差上申一札如し件

寛政八丙辰年五月六日

寂照寺月仙 印

宮内御會合御衆中

# 義太夫作がらの事

## 翼々居士

義太夫の作りがらのよきものに、時代違ひの入ごとのあるのは遺憾である。例へば「一の谷」の二段目に、薩摩守忠度が行き暮れて計らず菊の前が乳母の住家に宿る時に、乳母はやしが『マアはいつて煙草でも参りませ』と云ふ處がある。然るに煙草はポルトガル人が秀吉時代にアメリカから持ち來つたもので（慶長十年）源平頃には無かつた事は必定である。

「布引」に近江の團九郎助が在所の場に、百姓の噂に「今年の綿も百日ぶき」といふ事がある。綿も元龜天正の頃舶來して三河の國に蒔いて、それから廣がつたもので、これも時代違ひである。

「安達」の三段目に、袖萩は三味ひきとなつて出て來るが、三味線は二百八十年前に渡つたもので、八幡太郎の時とは更に四百年位を隔つ。是等の時代違ひは、作者が心つかかなかつたのではなかつたが、聴衆に目先のものを見る様に感ぜしむる爲に、わざとさうしたのかも知れないとは言ふものゝ、實際を考へるものには少し不釣合である。

「忠臣講釋」の如き、殆ど實際に近く書き、又少しづゝの虚作を交へて興味を加へたのは、恰も刺身の鮮かな時に、辛き山葵や香しき摘菊紫蘇又は防風などを添えた風情で面白い。さりながら「講七」よりも、「假名手本」の方が多く世にもはやさるゝは、先きに出

來た方が本家のやうに思はるゝ故か、この「假名手本」の穴だらけ、しかも今にすたらぬは其の肉の味である。

義太夫本の作たるや、他の小説も一般にしてなき事もある様に、成べく義理人情の入組みたる様に書きたてた上にも、猶舞臺の上のはれよき様にするが肝心である。故に「卅三間堂」などは、柳の精が人に化して一子までも産みなしたなど、今の實理主義の世の中にはおかしなものではあるが、千載古の大木を一飼鷹の爲に伐り倒すもあまり慘酷無慙であると、平太郎手練の弓でこの大柳を伐らざに、鷹までも助かつたとは適ばれのはたらきのみならず、其千載の大樹を助けん心根はいしくも又雅やかで、女精ある柳の惚れたと言ふも道理、又その一度救はれた由緒ある大木も、天下の至尊の爲には材身を犠牲となすも恨みなしとの作意は、曲作多きが中にも駭かれたものと言つべきである。



戲  
曲  
の  
類  
似

橘  
光  
風

院本は我國文學上に最も重要な關係のある事は、今更いふ迄もない。又我國演劇の起源は、遠く田樂猿樂神樂などに發したものとはいへ、其脚色の進歩、其意匠の功妙等の點は、皆悉く淨瑠璃操木偶の力に據ることゝすれば、歌舞伎に於ける時代世話の淨瑠璃狂言と稱するものゝ動作、見得、臺詞廻し、衣装付等みな是に依りて採りしからには、演劇は淨瑠璃の子孫とも言ふべきものである。

斯く貴重すべき曲譜は誰がこれを作り始めたかといふに、中古織田信長朝臣の侍女お通が、平家物語に倣つて作つたといひ、又足利の中世時代既にあつたといひ、諸説紛々として一定しない事は暫く措いて、淨瑠璃が現時の如く體裁を備へたのは、元録中俳優に小説に名を知ら

れた井原西鶴を以て濫觴とし、近松門左衛門に至て全く具備し、竹田出雲に及んで益々隆盛を極めたのである。此頃から數多の作者が輩出して、互ひに趣向を凝らし、筆鋒を磨いて各自新作妙案を競つて毎年各座にこれを演ぜしめた處、數十年の後には其作本は積んで汗牛充棟に至り、永年限りなき要求に應ずるに際限ある古今の事態を寫し出して作るには、斬新奇絶の種子のみ案出し難く、これを彼れに摸し、乙を甲に凝し、或は骨を換へ又は胎を奪ひ、果ては煮たり焼いたり窮境に陥つたものと推測される。然し乍ら、流石に其時好を穿ち、時代を世話に取りなし、男を女に翻案し、其世界を轉換して巧みに眼前を新奇にして時代人名の異なる處から、見聞きする人は太夫の妙

音と木偶使の絶技とに氣を奪はれて面白くも感じ、其都度見聞の價値あるものとして好評をなしたものは云へ、退いて其の院本の作意の如何に巨細の觀察を下す時は随分其精神は拙なく、今日の新作は昔日の陳腐に屬するものたるを見出すに難からず、現今普通演ぜられつゝある語物につき、對照しても模凝類の痕跡あるもの少からず、其作者、其作の年代前後等は暫く略し、左にその大概を列擧して見る。

岸姫松と御所櫻

飯原兵衛館の段と辨慶上使の段では、名も知れぬ婦女と野合の後幾年月を経て偶然相遇ふて歡ぶ間もなく首を打つ事になり(妻と子の差あるのみ)郷の君或は司姫の身替とする趣向は同轍であつて、又其證據物も人目を忍び暫しの假寝といふ記念に残したのは、大振袖の伊達模様と、我もかたみと引きさきやりし素袍の片袖と同種類にて、一つは『親子名乗の笑ひ顔、十七年目に泣やんだ云々』一つ

は「再び尋ね逢はんと思ひ、國を出て十年云々」とあり、又おわさが「夜も長月廿六夜の月待の夜云々」といふ處を、おそよが「過ぎつる頃源頼家様竹生鳥詣での時云々」といふ物語の節曲に色合を持たせたなど能く翻案に面白味を含み、兩種とも出來てをればこそ今猶共に持囃さるゝのであらう。

### 兜軍記と朝顔日記

阿古屋琴責の段と宿屋の段では、重忠岩永の善悪二人を變名して駒澤岩代とし阿古屋の三曲の二曲をへらして朝顔は琴の一曲に止どめ、金びかの問註所を世話場の宿屋に和らげてある事は巧みで「平家の御代と時めく春馴れにし人は山鳥の尾張の國から云々」と「一とせ宇治の螢狩にこがれ初めたる戀人と語らふ間さへ夏の夜の云々」との物語を骨子としての改作は最と面白く、上下出立の榛澤六郎が前垂かけの下女お鍋と變化する如きは、露組の唱歌の野暮臭きに似ず朝顔の小唄の憐れを以てした處翻案の上乗といふべ

きである。

### 蝶花形と玉藻前

小坂部兵部館の段と右大臣道春館の段とは、義理ある兄弟の笹市松太郎が眞劍の試合と同じ意味の、姉妹桂姬初花姫とが雙六の勝負とは頗る類似し、また兵部は孫の爲め、金藤次は子の爲めに腹を切て其赤心を物語るといふ條は、美姫と小童との人體は變はるも、その勝負によつて事を決するに至ては一つである。

因に、蝶花形の兄弟が眞柴大内と立別れての味方争ひは、廿四孝の三段目慈悲藏横藏兄弟が武田上杉と相對すると同じく、又味方につけんとて來れる出海加藤は恰も唐織景勝の舉動と異らぬ。

### 布引瀧と甕仇討

松波檢校琵琶の段と箱根瀧の段とに於ける三人生醉は、流石に布引の方は鳥羽の離宮の庭であつて、人物も仕丁であり種子も小櫻詮議の事であれば品等も高く聞こえ、瀧の方は施行の場で人物も乞食

で、其種子も又施行品の事から起るなどは凡て卑しく聞こへるが、こゝが時代と世話との差異ある處なるべく、兩者ともに優劣のない作柄である。

### 蘆屋道滿と三十三間堂

葛の葉子別れの段と平太郎住家の段とに於ては、動物と植物との差異こそあれ變化の人物が子別れの始末全く同じである。甲は「我は誠は人間ならず六年以前信田にて悪右衛門に狩出され死ぬる命を保名殿に助けられ再び花咲くらん菊の千年近き狐ぞや云々」といひ、乙は「假に女の姿と變じ柳が本に待受けて夫婦となりしも五歳の春や昔の春の頃季仲が鷹狩に鷹の足緒の掛りし時數多の武士に切崩され既に枯なん此柳其時お前が一矢の手柄鷹を助けて葉柳の云々」といひ、又甲の「命の恩を報ぜんと葛の葉子の姿と變じ疵を介抱自害を止どめいたはり附添ふ其内に結ぶ妹背の愛着心夫婦の語らひをなせしより」は乙の「其時情けの恩送る月日も重りて柳の花のコレ此綠丸最早

今年で五歳の』と脚色も異ならず、甲乙共に子別れの愁歎の末童子を連れて信田の森へと言く、又杖に我子を力草柳が本へといふが如き、餘りに能く似たればにや、其言譯けらしき詞を柳の變化が詞に托して『傳へ聞く安倍の童子が母上も丁度我身と同じ事一人の子を残し置き信田の古栖に歸りしとや』と斷つてゐる。

### 安達原と伊賀越

謙杖館の段と煙草屋の段では、いづれも雪中で袖萩はお君を連れ、お谷は己之介を伴ひ、父の難儀又夫の安否を尋ね來るも容易に名乗り會ふ事叶はず、空しく外面の雪に凍え寒氣の爲めに持病の癩を起して悩むといふ條りは全然同じ趣向と思はれる。然し袖萩は祭文を語るといふ所作があるだけに左迄撞着の點が眼障りにならぬ。

謙杖が勘當の娘を斥けて叱り散らすを濱夕が恩愛の情にひかされて憎い犬めといふあたりは、合邦辻で合邦の老夫婦が娘の玉手御前を拒みて、幽霊もさぞひだ

るからうといふ情況と同じ意氣組である。

### 盛衰記と千本櫻

盛衰記に於ける山吹御前と駒若君は、千本櫻に於ける若葉内侍と六代君である。又従者たるお筆が辛苦の笹引があれば、一方忠臣小金吾の討死あり、其事跡を巧みに摸して點綴したものと思ふ。又新中納言知盛の世を忍ぶ名が渡海屋銀平で樋口次郎兼光が名を隠して船頭松右衛門となり、其いづれも事顯はれて碇を背負つての大見得と、逆櫓の稽古の立廻りなど最も凄く換骨の手柄絶妙と稱してよい。

### 聚樂町と阿波鳴門

十郎兵衛住家の段と聚樂町の段とは、二者ながら女房の留守中、自己が急需の金の才覺に困る折柄來合はせた弟又娘の金を見て心動き、之等をすかして頼むも聞き入れず、遂に死に至らしむる途端女房が歸つて叱驚し歎き悲しむといふ趣向は、宛然そつくり摸したものとやうに思

はれる。で鳴門を十八番であつた朝太夫が長吉殺しを語つても絶妙であつた。例の十郎兵衛の詞に『アノ茜染に中形か』といふは原作をほのめかしたのではなからうか。甲は元文三年並木宗輔の作で、乙は明和五年近松半二の作、乙を甲に比すれば三十四年前後の作である。

以上掲ぐる如き種類を悉く揮究したら枚擧に暇がない。先づ三浦吉村が修羅場に色合を含む時姫との別離は、十次郎が初菊を捨て初陣に赴くと同じく、刈萱道心は出家の身を重んじて石童丸に名乗らず、重の井は重き役柄の爲めに涙を吞んで三吉に別れ、松王丸が返り忠は一段の骨子となつて小太郎の偽首で濟ませ、權太は悪者と思つたに似ず、維盛の偽首を出して先非を悔ゆるが如き、又野崎の久作は灸をすゑながら三人に諭し、城木屋の庄兵衛は月代しながら兩人に意見するなど、皆是れ作の精神に至りては一つである。



# 素義風流線

……士河芳……



錦 錦 松 氏

夕圖に眼を落して、何んといふ事もなく楽しさうである。

氏は岡三師の絃で、太十、新口村寺子屋、辨慶、陣屋などがお得意である。

目下特許出願中のレコードスタンドケースは、既に三越本店を始め市内一流の樂器店で賣出され、非常な好評を得てゐるが、このケースは十二枚入で、横に蓋をあけると中の板の重みで扇子形に開いて、一枚／＼引出すに便利で、又板も損しない。携帶用として頗る調法で、此外洋食器ケースなども極めて美術的に考案されてゐるが、いづれも贈答用としても最上の良品である。

素義風流線既載の諸氏芳名 玉井松樂

氏・松岡茂里雄氏・近江清華氏・小林和舟氏・山田壽彌氏・安藤どくる氏・寶藏寺天昇氏・高橋可遊氏・白井清華氏・湯原清司氏・高瀬操氏・歸山歸世花氏・猪谷銀水氏

深川の元常盤俱樂部の方へ曲らずに、有名な「どぜう屋」を左に見て橋を渡ると清澄町、恩賜公園の樹々は緑りして早くも初夏を迎へんと

してゐる、此の公園と川に挟まれた一筋の町の通りに、眞新らしい三階建の錦ケース製作所こそ、東都素義界にも知られた錦錦松氏の經營されてゐるのである。

昨秋住宅と工場を兼ねて改築されたもので、一階は材料、二階は製作所、三階は住居といふ風に、頗る整頓した構造である。

三階は東南の日をうけて冬は暖く夏は月島沖から吹來る風に涼がとれる。

こゝに錦松氏は種々の考案に餘念なく、傍ら、奥さんと睦じく義太夫談を交はされてゐる。

「稽古もろくすつぼしないので、それで五十義會へ出るなんて主人も随分亂暴ですよ、あなた、一生懸命にお稽古をしたらいいでせう」と奥さんに言はれて

「點なんかどうでもいゝんだよ」とにこり／＼、いろんなケースの下



## 音曲昔噺素養 (九)

大 阪 鐵 老 (寄)

今昔耳鳥齋主人の號は浪花音曲研究古  
考家として其名廣く、舊與銘人の事を辨  
へ、世上に融通せり。「文政の通人古太瓶  
藥居」親しく門に入れて聞くに「昔噺の滋  
味理曉を、草紙の端に書きとゞめ、友樂  
初心者助けにも」と云々とあり、撰擇し  
て敢て一夕の笑樂の具に供し參らせん。

### 淨瑠璃文章逸事 (續)

十郎兵衛は盜賊の頭もする者が、懐の金の多  
少見ざるは、きつい下手なる盜賊なり、金も  
少なし殺し様も悪し、切り殺すかしめ殺すか、  
しめ殺さは梅の由兵衛に似寄りて趣向古しと  
思ひ、または愁をしつかふ書たばかり、愁の  
大きさと娘の死に様不都合にて、十郎兵衛は

疎忽者、女房は周章もの、只た趣向新しきに  
心屈したるといふ者か、さしてもない世界人  
物ながく、愁を拵へ大場に書きなすは、元來  
無理なる事ゆへ、作者も如才有まじくなれ共  
何となふ底水くさく、腔の實と腔のうそとの  
意味計り、娘の死に様一ツにて、其場に居る  
人形皆分別なしとなり。此淨瑠璃ばかり差し  
て云ふにあらず。此んなの數多あれども當世  
耳ちかきが故に一ツ二ツかを捉へて云ふな  
り。

花たすきといふ淨瑠璃に、三途の川の川端  
で待て居てくださんせと云ふ文あり、此娘は  
後先の見へぬむこひ心なり、五年十年の暑寒  
風雨を凌ぎ、川端に待つて居らるゝ物か居ら  
れぬ物か、大體知れた事なり、未來は一トツ蓮  
などいふ文句も古き故新しき文を書きかへる

### 義太夫界起源いろく

☆五錢木戸の始つたのは、明治廿七年の頃  
綾瀨太夫と播磨太夫と分離して、綾瀨は綾  
之助をスケに置き、女義の一座と會せし時  
より始まる。其後上京する太夫で、女義を  
前に据える一座は總て五錢と相場が定つた  
やうに、彌生といひ、路といひ、調といひ  
何れも木戸は五錢であつた。

☆女義太夫の束髪。高座に上る女義太夫の  
髪は大抵島田、銀杏返し、天神鬘、桃割、三  
ッ輪、唐人鬘、或は水髪、櫛卷、鯛一の丸  
鬘などもある中に、往々和洋折衷的の束髪  
を見る事もあつたが、女太夫の束髪で高座  
に上る事は明治廿二年に上京した豊竹小綠  
から始つたもの。

☆高座を廻り舞臺とした事は、人形芝居で  
太夫の高座を廻り舞臺にしてある事は前々  
からではあるが、普通寄席の高座をブン廻  
しとせるは、明治廿五年秋改築せし雷門東  
橋亭を以て嚆矢とす。

☆懐中物用心札は以前は疏未な紙に書て場  
内の柱などに張り出したものであるが、明  
治廿五年の頃から勘亭流に書いた下へ紙入  
煙草入、時計、簪、錢入などを書きし繪び  
らを各席一定に張り出す事となつた。

心と見へたれども、何成とも文の有べきことなり。是等は文の新しきに風して女の情を取り損じかはる者なり、如斯たぐひ數多あるとも言ひ盡すに暇あらず。當時文盲愚智の見物計りなれば事濟めども、相應文才ある人も聞物ぞかし恥ずべき事なり。五段の淨瑠璃大序は口傳、五段目は明語といひて、一日世界の解治りなれば大切のもの場なり、近年の作は五段目なし。偶五段目あらば紙半枚ばかりに何の譯もなき事を書き、夫れも本の出所はなし正本出すに據なく不性無性に五段目を出すなり。

當世芝居と見物も氣短かく早合點して、五段目は悪人退治見い聴かいでよひ、せいでよし、なれども正本は作者の寸尺あらはれ不智不文の劣名遁れがたし。

淨瑠璃の趣向は、世界の大小廣狹に従ひ、古きを新らしく用ひ直なるを近世に用ひて、趣向は大體に立てらるゝ物なれども、文は法ある者ゆへ六ツヶ敷者なり。假名つかいを委敷く會得すれば、知行にも成程の事なれば、知らぬも理りなれども、少しは心がくべき事なり。太夫も是に同じうして、少しは字も讀み假名つかひも習ふべし、文の善惡に依て損

得ある事、自然と情の厚薄聽問衆人の心に通じ、太夫の不調法となり笑はるゝことなり。

爰に餘りあきれの舞にかはることあり、夕霧文章は近松門左衛門の作にして、夕霧といふ傾城の名を題にして、春花秋花の古歌を引き月雪鳥の附合、戀慕忍びの古事を、一段に書て人も知りたる銘人なり。尤も國太夫一仲節杯にて語ると雖、義太夫ならば義太夫を語る太夫は、義太夫を語るべきに、一仲節にて語るは何事ぞや、義太夫の語りし節を知らぬ故と云ふべきか。夫は正本に義太夫の打かはる章を見て考ふべし。此淨瑠璃嘉助綱太夫拵へ語りしが、是とも時代違ひゆへ、昔は知られども義太夫の本體を崩さず、義理ありて面白し。その頃芝居にて語るべきに極りしが、病重りて故人と成る。尤も當世者の節にては見物の氣に合ふまじ、なれども少しは遠慮すべきはづ凡てサワリと云名目あれば一仲節も入まじにはあられども、サワリも大體限りある者なり、一仲節を義太夫の中へ突き交せるは餘りに不仕付成べし。

か様に太夫より行儀崩すゆへ、町中の人も是を能と思ひ語る事義太夫の意も、銘作の本意も失ふ。流を汲む人には冥加如何有るべし。

◆ 花 輪 ◆ 花 束 ◆ 花 籠 ◆

御送迎・御佛事・御見舞は何卒弊店へ御用命願上候  
 新花・廉價・迅速は弊店の特色

花

下谷稻荷町(青バス車庫前)

サカタ・フロリスト

電話(下谷)六一八一番



太棹社  
彙報

## 待望の第廿八回

# 東都五十義會開催決定

昨春秋は事變の關係上審査會と代へて皇軍慰問献金義太夫會を開催して、斯界に好評を博した東都五十義會では、いよ

を重ね、近く會則の配布などもあり、東都素義團體の大同團結の成果を結ぼうとしてゐる。

事務所は京橋區木挽町四ノ二吉田三芳方に置き會費は拾圓、出演時間は二十分申込締切は五月二十日、審査員は例の通

會審査會を華々しく開催と決定。  
常務理事細川清、吉田三芳兩氏を始め幹事諸氏の異常な努力に依つて今回は理想的な五十義會たらしむべく、協議の度

り星野桔梗、吉田三芳、長谷川文久、安藤光樂の四氏。  
各方面ではこの壯舉を知るや忽ちハリ

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。  
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。  
▽特種の催はしの外前置きを略します。

——記者——

キリ、それ〴〵猛練習を開始してゐるので、當日の成績は期待に償しよう。

## 第三回 中老會

前月は春和氏の病氣、松玉氏の旅行にて止むなく休會した同會は、去る四月十三日午後六時より第三回を小石川俱樂部に開催。今回より原田越巴氏が加入された。

沼津(春和、条造) 本下(有明、新兆)  
長局(松玉、玉勝) 柳(操、道之助) 美濃屋(越巴、廣助) 鯨屋(紅司、勝鳳)  
合邦(可松、条造)

## 淨曲無名會

舊臘廿六日突如永眠された會員竹内たもつ氏の爲めに、喪中の如く久しく休會を續けた淨曲無名會は、久々にて過ぐる四月廿八日午後五時より、丸ノ内電氣俱樂部にて開催した。

柳(團壽、龜造) 野崎(美峰、猿之助)  
儀作(和樂、猿藏) 堀川(國聲、猿三郎)  
太十(巴、猿之助)

# 京濱素義聯盟大會

芳、絃平)

昨年六月結成された京濱素義聯盟は、四月廿三日より三日間毎日午後一時より大井海岸の鎮西閣に於てその第二回大會を開催、幹事諸氏の努力にて大多數の出演者を以て、賑々しく三日間とも満員の盛會を極めた。

駒登太夫) 安達(廣助、雷糸) 岡崎(源玉、駒登太夫) 鮎屋(春日、雷糸) 鳴門(壽、駒登太夫) 瀧(柳光、雷糸) 太十(可笑、團蝶) 陣屋(一鶴、駒登太夫) 沼津(光玉、雷糸) 寺子屋(美幸、稻吉) 寺子屋(貴昇、駒登太夫) 帶屋(喜吉、稻吉) 仙君) 帶屋(清、道之助) 堀川(三芳、沼津(古清、昇之助) 陣屋(東光、絃平) 猿三郎) 城木屋(かなめ、仙君) 朝顔(其

## 竹内たもつ氏

## 追善義太夫會

(初日) 酒屋(美義、團蝶) 太十(金龍駒登太夫) 合邦(林、雷糸) 壺坂(昇朝朝見太夫) 合邦(鱗、團造) 柳(富穂、駒登太夫) 寺子屋(梅笑、昇之助) 太十(ひさ司、駒登太夫) 下總屋(仙昇、朝見太夫) 帶屋(美鳳、雷糸) 鮎屋(吾樂、昇之助) 太十(甲、重之助) 聚樂町(壽樂、朝見太夫) 阿漕(遠波、絃平) 鮎屋(胡蝶、雪糸) 合邦(サ樂、雷糸) 安達(清司、猿藏) 寺子屋(桔梗、辰六) 伊賀五(古清、團造) 白石(龜鶴、駒登太夫)

(二日目) 堀川(古清、團造) 十種香(松巴、團造) 柳(啓子、雷糸) 忠三(雅章

竹内たもつ氏の追善義太夫會は、四月十五日午前十時より並木俱樂部に催ほされた。これに先立ち一日夜、未亡人喜久子さんは開催準備の協議をかねて、故人と親しかりし舊友諸氏を自宅に招待されたが、何しろ、東都素義界に功勞多かりし故人の事とて、師匠鶴澤辰六師の部屋は申す迄もなく、五十義會、素義聯合を始め、聲友會、かな文字會、竹韻會、無名會其他各會より多數の出演を以て、聽衆は開場前より押しかけ廊下に溢るといふ近頃稀れな盛會であつた。なほ休憩時間には故人吹込みの『帶屋』『湊町』など得意のレコードにたもつ氏ありし日を偲び涙を新らにした。

手向草(竹内喜久子、辰六) (以下抽籤

順) 壺坂(清子、喜久子) 沼津(松樂、勢、龜造) 吃又(橘、辰六) 十種香(清猿平) 太十(里芳、勝助) 菅四(吳羽、華、寛三郎) 紙治(兒雀、辰六) 岡崎(金米翁) 紙治(銀水、猿藏) 合邦(彌生、風、道之助) 合邦(語松、米翁) 長局(葵辰六) 忠四(華笑、勝鳳) 本下(清福、辰六) 沼津(とをる、紋左衛門) 阿漕(三猿藏) 合邦(茂里雄、清助) 沼津(筑波、幸、東) 湊町(文久、猿平) 鮮屋(素鶴團八) 戻り橘(長平、龜造) 鮮屋(清華、辰六) 忠九(千鶴、香伯) 引窓(桔梗、猿玉) 十種香(三木子、辰六) 安達(清、辰六) 大切掛合(本下) 若狹之助(巴) 司、猿藏) 忠四(登、紋左衛門) 鮮屋(紅、伴左工門(和樂) 三千歲姫(國聲) 下部司、勝鳳) 沼津(更雨、辰六) 佐太村(清(和か葉) 本藏(美峰) 絃(猿之助) 琴道之助) 鮮屋(三芳、猿三郎) 新口(和(松四郎)

## 二世 鶴澤觀西翁襲名披露會

梅本香伯氏の二世鶴澤觀西翁襲名披露  
 義太夫大會は、既報の通り愈々來る五月  
 廿三日午前十時より、仁壽講堂に於て華々しく開催さるゝが、前號に報道した本下の掛合が『山の段』に變更され午後一時頃の上演に決定し、序席を香伯會の諸氏が承つて「本下」の掛合を上演、そして大切には初代觀西翁が晩年老後を養ひつゝ作曲されし「高砂相生の松」を新義

梗、朝見太夫)(猿之助、猿藏)

高砂相生の松(南部太夫、陸路太夫、

隅榮太夫、叶美太夫、越名太夫)(二世觀西翁、寛治郎、勝平、徳若、勝芳、網延)

### 初稽古一週年

### 記念義太夫會

藤本喜鳳、齊藤正鳳の二氏が斯道に入りて初稽古一週年といふので、この記念義太夫會が四月十一日正午から左の番組に依り、雷門並木俱樂部で催ほされた。

沼津(越國) 赤垣(長男) 八陣(源昇)

儀作(津ばめ) 酒屋(銀司) 辨慶(千昇)

野崎(吉歌) 寺子屋(文林) 壺坂(金彌)

柳(玉寶) 太十(巽) 瀧(金鳳) 忠四(筑波) 逆櫓(旭) 朝顔(正鳳) 帶屋(清)

先代(喜鳳) 白石(操) 餘興(舞踊) 水

鳥壽美子、同悦子) 大切(白浪五人男)

駄右衛門(清) 辨天小僧(喜鳳) 忠信(操)

赤星(正鳳) 南郷(千昇) 絃(道之助、

越道)

座の一黨で芽出度終演する事になつた。  
 掛合役割並に「高砂相生松」太夫三味線左の通り。

本下||若狹之助(近江清華) 本藏(松寶) 三千歲姫(千鶴) 伴左工門(關路)

三味線(二世鶴澤觀西翁)

山の段||背山(大判事、殿母太夫)(久

我之助、東太夫)(勝鳳、辰六) 妹山(定

高、湊太夫)(雛鳥、都太夫)(小菊、桔

# 第卅回 豊澤會

時局に鑑み昨秋の大會を遠慮した豊澤

會は本年十一周年となり、其第卅回春の大會を來る五月十二日午後六時より、丸の内電氣俱樂部に開催と決定、目下猛稽

古中で、猿之助師の『二度目』が期待され

物になつてゐる。

(第一) 車引||時平(蟻鳳) 松王(扇之子(美之助) 絃(猿之助) ツレ(猿藏、助) 梅王(美之助) 櫻丸(松四郎) 杉王 芳太郎、猿喜知、松四郎、蟻鳳)

## 東上の新義座

前號既報の通り、つばめ大夫脱退後精

鋭新らたに陣容を整へた新義座は、第五

回特別公演として愈々五月廿五、六、七

の三日間、丸ノ内仁壽講堂で毎夕六時か

ら左の番組に依て開演が決定した。なほ

乙女文樂使用が變更されて最初の報導通

二日目||一の谷(組打)熊谷(隅榮大夫)敦盛(叶美大夫)玉織姫(越名大夫)三味線(網延)帯屋(陸路大夫、徳若)宿屋(南部大夫、勝平、勝芳)忠九(叶大夫、觀西翁)千本櫻道行(角大夫、吉五郎、勝平、勝芳、網延)

## 壽會

綾秀會の別會として生れた壽會は、久

々にて四月七日交正俱樂部に開催。

酒屋(歌吉)安達(壽光)寺子屋(壽

登)絃(綾秀、歌吉)

# 豊澤雷助慰安義太夫會

大東京魚河岸連

發病以來永々病床にて加療中の豊澤雷

助師が、今後再び立つ能はざるを慰安す

る爲め、極めて親懇なる豊澤猿之助、鶴

澤司好、鶴澤寛三郎、野澤語左工門の諸

氏發企のもとに、豊澤猿藏、豊澤仙十郎

豊澤良造の諸氏極力奔走し、岩木義雀氏

を始め雷助連の後援と同門弟一同の盡力

にて盛會な慰安義太夫會が四月廿日午後

一時から並木俱樂部で催ほされた。出演

者は左の通り。

橋辨慶(高之助、猿藏) 志度寺(義雀、

良造) 夕顔棚(糸樂、語左工門) 太十(里

芳、芳太郎) 日吉(雷糸、高之助) 太十

(榮、高之助) 八陣(山門、猿藏) 先代

(廣助、雷糸) 白石(三樹、仙十郎) 岡崎

(北斗、猿之助) 太十(正佳、佳照) 合邦

(千鶴、香伯) 太十前(紅司、勝鳳) 同奥

(登盛、桑造) 岸姫(葵、良造) 儀作(有

曲、語左工門) 陣屋(千曲、團市) 鮎屋

(潮、米翁) 新口村(美峰、猿之助) 鮎屋

(清、道之助) 壺坂(かほる、雷糸) 鮎屋

(富次、松四郎) 油屋(若狸、才綱) 草履  
打(清子、雷糸) 辨慶(司重、團吉) 玉  
三(丸都、都太夫)

## 平井梅子氏

## 追善義太夫會

平井榮氏は平井梅子さんの十七回忌法

要を營み、愛惜の念止み難き氏は會主と

なつて、淺草公園俱樂部で四月二日午後

一時よりその追善義太夫會を催ほした。

一時よりその追善義太夫會を催ほした。

番組左の通り。

千本櫻道行(忠信、いと。靜、てい。

藤太、なみ。絃、のぶ、三宮、いね、み

よ子) 新口村(力、いね) 鳴門(孔雀、

いと) 辨慶(八十八、團龍) 酒屋(松の

井) 紙治(二見、團龍) 八陣(有明、新

兆) 太十(さつき、いね) 忠四(榮) 太

十(三壽、團龍) 先代(菊美、みよ子)

儀作(龜鶴、操) 合邦(美翠、新兆) 鰻

谷(操、いね) 沼津(松玉)

## 素人演藝大會

高品一重、田口辰壽、阿部一などの諸

氏、謂所魚河岸の素義連は、例年笠間稻

荷に參詣をして其都度同地で一夕の義太

夫大會を開催したものであるが、本年も

例に依り前記三氏に松岡茂里雄氏も參加

其他長唄、清元で低からぬ鼻の人々が加

はり、去る四月廿一日參詣了つて演藝館

に於て午後六時より出征軍人遺家族慰安

として左の番組に依り賑々しく開催、定

刻前より七八百名の聴衆を以て既に滿員

の盛況を呈した。

太十(掛合) 光秀(茂里雄) さつき(一

重) 十次郎、操(辰壽) 久吉、初菊(一

絃(芳太郎) 清元(編新、丸長) 先代萩

(辰壽、芳太郎) 端唄(鈴龜) 柳(一、芳

太郎) 長唄(尾金、丸長) 寺子屋(一重

芳太郎) 清元(龜新、大萬) 新口村(茂

里雄、芳太郎) 野崎(掛合) 久作(一重)

お光(辰壽) お染(茂里雄) 久松、よし、



母(一)絃(芳太郎)

## 互調會連の清遊

野口みなと、乃村乃菊、岩木義雀、齋藤三生の諸氏が組織して、毎月各席で睦

じく例會を催ほしてゐる互調會は、去る廿四日修善寺に遊び、仲田屋旅館に於て午後六時より開會、左の番組により互ひに熱演して大好評を博した。

本下(蝶子) 寺子屋(みなと) 沼津(乃菊) 岸姫(義雀) 鳴門(三生) 絃(良造) 佳照、鹿重、蝶子)

## 第三回若手會

四月二十六日午後六時より下谷、入谷俱樂部に開催。

油屋(光玉、条造) 酒屋(呂聲、力彌) 玉三(都昇、都太夫) 儀作(柳光、条造) 壺坂(高尾、力彌)

## 文樂社創立二週年

## 記念淨瑠璃會

同業大阪文樂社は今回創立二周年記念として、四月三、四の兩日午前十時より堀江演舞場にて、桐竹門造指導乙女文樂人形一座を使用し、左の番組通り盛會な人形淨瑠璃大會が開催された。

(初日) 草復打(雛代、團秀) 質店(美昇) 辨慶前(豊、卯月) 同切(藤政、新造) 橋本(鶴峰、友造) 陣屋前(秀玉、友太郎) 同切(信濃、稻丸) 壺坂(奥村三玉、八造) 玉三(まつ尾、龍市) 九段目(利生、團友) 酒屋(竹村三玉、叶太郎) 太十(掛合) 十次郎(孝玉) 初菊(旭暉) 操(正宗) 久吉(櫓) さつき(勢月) 光秀(梅曲) 絃(龍市) 白石(掛合) 宮城野(可昇) 宮柴(松玉) やり手(昇玉) しのぶ(生樂) しげり(櫓) 宮里(うろこ) 宗六(柳平) 絃(新造) 逆櫓(掛合) 松右工門(うろこ) およし(可昇) 船頭(米笑) お筆(生樂) 權四郎(昇玉) 絃(新造)

(二日目) 先代(雛代、團秀) 湊町(重司) 鳴門(一枝) 寺子屋(松光、友作) 鯨屋(紫幸、團友) 忠四(登一、團友)

堀川(信昇、叶、叶太郎) 陣屋前(重枝卯月) 同切(轟、六之助) 太十(掛合) 十次郎(都雀) 初菊(正若) さつき(有斐) 久吉(白鳳) 操(箕雀) 光秀(乙鳥) 絃(市之助) 酒屋(掛合) 貢(南子) 喜助(虎勢) お鹿(木鶴) お紺(美昇) 北六(和十) 岩次(ろ昇) 萬野(米笑) 絃(雛昇) 合邦(掛合) 玉手(和十) 入平

(昇玉) 俊徳丸(生樂) 母(松玉) 淺香姫(可昇) 講中(うろこ) 合邦(櫓) 絃(龍市) 忠七(掛合) 由良之助(榮司) 力彌(昇玉) おかる(芦月) 亭主(利生) 伴内(うろこ) 平右工門(紫紅) 絃(清芳)

## 義童勘太郎追善會

四月廿四日藤井天海氏の肝入りで、道頓堀俱樂部で義童勘太郎追善義太夫會が新作淨瑠璃車進を兼ねて催はされた。

東京旅行日記(古田利登) 二葉桐(竹本仙千代) 義童勘太郎(藤井天海) 天理教祖傳(神田友榮) 天理教靈驗記(河野三調) 軍國母の賜物(豊竹照太夫) 絃(竹本源福太夫、豊澤助次)

# 大阪文樂座五月特別興行

最近は顔も揃はず、開演も演舞場などで聊か淋しい感のあつた文樂人形淨瑠璃は、今回久々に四つ橋の本城文樂座に歸り、津太夫、古靱太夫を始め其他太夫三味線總出演で、竹本織太夫、竹澤團六の襲名披露特別興行を五月一日午後二時より華々しく開演した。

(第一) 新版歌祭文 鳥居前口 (長尾太夫、叶太郎) (富太夫、團伊三) 奥 (文字太夫、廣助) 野崎村 (お光、鍛太夫) (お染、伊達太夫) (久松、源太夫) (お勝、辰太夫、竹太夫) (およし、常子太夫、津磨太夫) (久作、大隅太夫) (新左工門、ツレ友造、友駒、重造、新太郎) 油屋中

(第二) 日吉丸稚櫻 小牧山城中 (駒太夫、清三郎) 切 (津太夫、網造)

(第三) ひらかな盛衰記 逆櫓 (つばめ太夫改竹本織太夫、團二郎改竹澤團六)

(第四) 連獅子 (鶴澤道八作曲、榎茂都陸平振付) 雄獅子 (相生太夫) 雌獅子 (呂太夫、伊達太夫) 子獅子 (源太夫) (幡路太夫、千駒太夫) (駒若太夫、相瀬太夫) (鶴澤道八) (野澤吉彌) (友衛門、吉左) (喜代之助、八造) (鶴太郎、友太郎、清友) (一郎右工門、重次郎、廣二)

## 兜會春季臨時大會

五月八日於並木俱樂部開催

—番組は編輯締切迄未着に付次號—

## 御挨拶

四方の皆々様益々御機嫌麗敷何より悦ばしう存じます。

扱て當新義座生れましてより御一同様の御庇護を蒙り、早くも三とせを迎へ順調に生ひ立居ります事は、偏に御引立の賜と厚く御禮申し上げます。

去る日當初の同志つばめ太夫外兩三名文樂復歸か退座致しましたにより、新しく主旨に共鳴精銳陸路太夫隅榮太夫の兩名を迎へ入れ新陣容を整へました處、此度御當地のみ竹本叶太夫、竹本角太夫三味線香伯改メ二世鶴澤觀西翁野澤吉五郎の方々の義侠的助演によりまして、力強く御目見得が出来る事になりました、素より修業第一斯道研磨に倍々勇往邁進致しますれば、此の上とも御見捨なく御叱正御後援の程を只管御願ひ申上ます。

新義座一同 百拜

會

報

(投稿歡迎)

# 大東京嬉會

森 三好

新緑萌立ち春濃かに陽光燦々たる四月下旬の好季節に當り、大東京嬉會を去る四月廿三日本所菊川俱樂部に於て第五十六回を開催せり。當日は曇天にも不拘大入り盛會にして、三枝の花形花代嬢入會せられ、園樂、喜三子嬢、單語及三好の諸太夫を彈き大いに拍手喝采を博せり。同嬢は將來當會の爲めに三枝を以て大いに努力せらるゝ豫定なり。尙當會へ最初より三枝補助にて盡瘁されし竹本仙君師は此の四月吉日を以て竹本仙照と改名せられ、續いて舊倍當會の爲め御後援有る筈なり。希くば愛義家會員益々御健全御發展の榮有らん事を。

大東京嬉會副會長の重責を負ひ、語りも彈も兩方出來得る素義家に稀に視るべき北脇花昇氏は都合に依り吉祥寺方面に引越され、當會の片腕を引き取られたるが如く惜しみつゝ、あり、且又同氏御家内蝶子様も素人に稀に見

る三枝御上達當會の爲め出演せられ居りしが是又不參の己む無きに至れるを甚だ當會の遺憾に堪へない次第なり。右兩氏は御引越以來日を追て愛義家集ひ目下に於ては恰も數名の門弟出來、一ツの團樂會を組織し盛んに練磨せられつゝ有る由、因に四月廿三日菊川俱樂部に於て左の如く開演せり。

(佐倉、文鏡)(太十、喜三子)(寺子屋、岡玉)(廿四孝、三好)(朝顔、さかへ)(合邦、專好)(三勝、園樂)(城木屋、かなめ)(新口、單語)三味線清勝、三好、花代、仙照)

表 装 迅 町 寧  
廉 速 價

本郷區菊坂一

芋 弘 堂

## 情 歌

(淨瑠璃文句入)

▲ 添ふた其とき事かくまいと(白石)『色や浮名をたしなんて』今から世帯の下ごころ

▲ 明かす中にも苦はさせまいと(紙治)『無い者までもあるやうに』見せる笑顔の其つらさ

▲ これほど思ふてもし添はれずば(辨慶)『云ふて歸らぬ事ながら』じつも寶の持ちぐさ

▲ 鐘もうちらまず浮名もたゝず(本下)『こゝに月ゆき花かわ戸』ひとり住居の氣の輕るさ

▲ 苦勞するのは覺悟のうへで(野崎)『來事は來ても在所の事』儘にならば愚痴も出る

本誌後援名譽會員

(イロハ順)

(東京之部)

高島	一廣氏	保々	長平氏	松尾	武市氏	清水	彌生氏
廣瀬	いろは氏	栗原	千鶴氏	大用	大嘉津氏	國井	丸都氏
岡崎	四六氏	神馬	里芳氏	田口	辰壽氏	松林	福笑氏
吉川	浪補氏	本木	大熊氏	疋田	大龍氏	鈴木	兒雀氏
平野	ろ昇氏	奧村	沖氏	井上	巽氏	水戸部	壽氏
阿部	一氏	鈴木	和樂氏	小林	太二八氏	原田	越巴氏
中澤	巴氏	小林	和舟氏	根本	團壽氏	河野	國聲氏
竹内	とる氏	本多	可笑氏	坂倉	素遊氏	松岡	語松氏
安藤	どくろ氏	大和田	可笑氏	浮谷	祖樂氏	松田	光風氏
吉田	登盛氏	飛石	かなめ氏	荻原	うつぼ氏	寶藏寺	天昇氏
小川	都山氏	加藤	兜氏	乃村	乃菊氏	大築	葵氏
安藤	都昇氏	高橋	可遊氏	高野	昇氏	松本	朝章氏
		西田	可松氏	中野	吳羽氏	及川	朝旭氏
				石川	華笑氏	寺岡	三幸氏

木村さかえ氏  
 齋藤山生氏  
 平井榮氏  
 細川清氏  
 金田金鳳氏  
 井田菊泉氏  
 錦錦松氏  
 淺田奇聲氏  
 歸山歸世花氏  
 川奈部銀司氏  
 猪谷銀水氏  
 岩木義雀氏  
 岩田末成氏  
 高瀬操氏  
 吉田美地旬氏

横井三由氏  
 野口みなと氏  
 岡田源氏  
 北村三葵氏  
 池田三國氏  
 吉田三芳氏  
 鈴木松寶氏  
 玉井松樂氏  
 菊池秋月氏  
 平井壽樂氏  
 山田壽瓢氏  
 田口司重氏  
 濱口秋華氏  
 武笠宏亮氏  
 高品一重氏

桑原美峰氏  
 松岡茂里雄氏  
 白井清華氏  
 近江清華氏  
 湯原清司氏  
 沼井盛鶴氏  
 (地方之部)  
 米國平野一昇氏  
 同武榮玉氏  
 同杉山陶岳氏  
 同兼廣廣玉氏  
 同西本西紫氏  
 榑太宮下杉鳳氏  
 横濱田島集樂氏  
 大垣吉岡十八公氏



皆様の理想にピッタリとした独特の特品

新考案

# レコード スタンド ケース

今までにない

素晴らしい

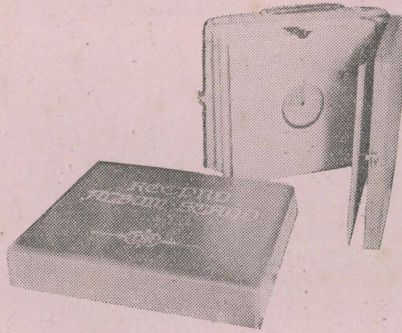
アルバムケース

です

レコード音楽

愛好家の皆様に

是非!!



特長

- 1 超モダーンの体裁
- 2 アルバム式(十二枚入)
- 3 携帯便利
- 4 堅牢至極
- 5 価格低廉

發賣以來非常な好評を戴いてをります。三越本店及一流樂器店にて販賣致して居ります。

美術ケース  
荷造箱  
蒲鋸板  
家具一式

東京市深川區清澄町二丁目十一

錦ケース製作所

考案者

錦學四郎

電話本所(73)二七六四番

宣傳中特價 ¥ 3.00 (十吋) ¥ 4.20 (十二吋)

本社  
創立  
拾周年記念義太夫大會

新緑の節同好諸彦益々御清祥の段奉慶賀候陳者弊社發行の『太棹』儀毎度御後援御愛讀を忝ふし難有御禮申上候

然れば弊社儀創立茲に拾周年を迎へ候に就ては恰も國民精神總動員の現下にも有之忠孝仁義の道德思想を強調すると共に我が國民精神宣揚の一端と致し以て創立拾周年を記念仕り近々並木俱樂部に於て義太夫大會を開催致し度候間何卒御援助御出演賜り度此段不取敢誌上を以て御願申上候

太  
棹  
社